

第1回鶴岡市総合計画審議会市民教育専門委員会

- 日 時 令和5年1月18日(水)午後1時30分から午後3時30分まで
- 場 所 鶴岡市役所6階大会議室
- 出席者 別紙委員名簿のとおり(委員10名中8名出席※)
※加藤勝委員、照井和委員欠席
- 傍聴者 3名
- 協議題等
 - 1 委員長選出 鈴木淳士委員を委員長に選任
 - 2 委員長職務代理者の指名 酒井英一委員を職務代理者に指名
 - 3 説明 事務局から説明(質疑なし)
 - (1) 第2次鶴岡市総合計画基本計画の中間見直しの進め方について
 - (2) 第2次鶴岡市総合計画基本計画の産業分野の評価・検証について
 - 4 協議
 - (1) 後期基本計画策定において重視すべき点について
→主な意見は下記のとおり
 - (2) その他
→なし

○ 主な意見

(委員)

- ・ KPIについては項目によって数値化が難しいものもあり、さらにはコロナ禍での制限もあって、現状値と実績値については参考程度で評価するしかない。
- ・ 策定当時、色々な意見や考え方を入れながら計画立案したので、基本的計画はぶれないほうがいい。
- ・ 一番の問題である人口減少を踏まえて考えなければならない。分散化してきた機能がある程度集約化する方向にすべき。例えばコミュニティセンターでそれぞれ行っている講座等の事業を一緒に行うとか、統括する形も検討していく必要がある。
- ・ インターネットやデジタルを使った施策を積極的に展開すべき。
- ・ 子どもが都会に行き、親が亡くなると「家じまい」するわけだが、所有していた美術品や文化財、古文書等が流出、廃棄されることが多くなっており問題である。救済できる対策が必要。

(委員)

- ・ 他県から嫁いでくると、ご飯も美味しいし、空気もおいしいし、水もいいし、人もいいしこんな素敵なところを何故離れていくのだろうと思う。高校卒業後に鶴岡から離れても、戻ってきたいと思ってもらえるよう、子どもの頃から地元の魅力を伝える方策をもっと講じる必要がある。
- ・ コロナの影響で学校行事がなかなか出来なかった。子どもたちのコミュニケーション能力の低下を懸念している。今後、就職活動など様々な段階でその影響が出てくるのではないか。

(委員)

- ・ 地域の人が集まる機会として、また、地元を自慢や誇りに思ってもらいたいという思いから藤島歴史公園でイルミネーションに取り組んでいる。取り組む中で、他地域から注目され、人が集まってきて、褒められて自信につながっている。このような成功を積み重ねることで、子どもたちに良さが伝われば、地元に戻ってきたいという思いにつながっていくのではないか。
- ・ 修学旅行やスポ少等いろいろなことが制限されて子どもたちにストレスが蓄積され、不登校につながる要因のひとつとなっている。不登校の子どもへの対応として、オン

ライン授業等、もっと迅速で柔軟な対応が必要だと感じている。

- ・マスク着用による影響がとても大きいと感じる。お互いの顔が見えないことで、今まで読み取っていた感情が分からなくなっている。加えてマスクを外すことに抵抗がある子どもが多く、今後の問題だと思っている。

(委員)

- ・コロナ収束が見えない中で対策と社会活動の両輪を進めていかなければならない。スポーツ大会の運営のあり方やコミュニティ活動、公園や内川清掃などボランティア活動等を今後も進めていくためには、若い人たちの人材確保、世代交代が大きな問題である。
- ・スポーツ少年団の理念や市民憲章の五本柱などを子供たちにもよりわかりやすく理解できるよう、今後も取組を継続してほしい。
- ・良いまち、ひとつづくりの基本、道しるべであるのが鶴岡市民憲章である。市民の重要なことを決めるこの会議で、次回から唱和をしていただきたい。

(委員)

- ・総合計画の基本計画各部のKPI 指標は目標として大変重要だ。同様に数値に表れない未来想像のプロジェクト目標で生まれる組織の横の繋がりは指標が無いがその進捗が重要視されることを願う。
- ・東京から鶴岡にUターンしたきっかけは「鶴岡の食」の幼少期の記憶である。総合計画キャッチフレーズの「毎日美味しいここで暮らしたい」を実感している。
- ・給食センター発祥の地として、鶴岡の給食の質の高さやおいしさ、その維持は重要である。
- ・それと同様に子ども達が生きた魚などを捌くところを見て命をいただくという体験や、おにぎりを自分で握り誰かに食べさせて喜ばれる体験等を通じ、生きる力を蓄える取り組みを市民がもっと応援できる体制づくりが必要だ。子どもたちが人との関わり方や絆など希薄になりつつある社会性を育むことに、部門横断的な取り組みを強く望む。
- ・そのためには農業・漁業の従事者や支援者等、食に関わる人たちと子どもたちが交流する場を増やすことで鶴岡の食を理解、実感できる。このような市民活動を支援する施策が必要である。

(委員)

- ・女性が就職により域外に出ていってしまうというのは残念なこと。地元の会社に就職し、そこで生き生きと働き、活躍する女性が増えることに期待したい。女性が活躍できるまちは、やっぱり魅力がある。
- ・庄内海岸のごみの多くは国内由来であることが調査結果でわかっており、外国からのごみは合わせて1割から2割ぐらいというデータがある。最上側の河口と赤川の河口がひどいという現状を市民が認識する必要がある、小中学校で講演する機会を作っている。市民への更なる周知が必要である。
- ・鶴岡市1人当たりのごみの量が、全国平均に比べると多いというデータがある。鶴岡市には分別、再資源化のルートがあるが、これを徹底することが重要。
- ・リサイクルや資源回収を子供のうちから教える必要がある。自治会活動がキーとなるが子供の数が減少して子供会活動自体が立ち行かなくなる状況もある。地域づくりや担い手確保は大きな課題である。2、3年の輪番制で会長が変わるとなかなかうまくいかない。次世代の担い手を青年部などのグループを作って育てていくと、地域コミュニティも明るくなり、自分の育った地域は良いと思ってくれるのではないかと。

(委員)

- ・計画見直し、中間評価については、予想しなかったコロナの状況が入ってきて評価の仕方が難しい。成果指標自体も馴染まないものもあるし、全部が右肩上がりだ数値が

よくなるわけでもない。当初計画から大きく見直しをする必要はないと思う。

- 急激に変化している人口減少や少子化の部分は見直しの検討を加えていくべき。
- 学校でも感染拡大を防ぐために行動制限を強くせざるを得なかったことでコミュニケーションの場がかなり制限された。はっきりした数値や科学的なデータではないが、イライラするとか集中が続かない等の影響がかなり出ていると感じている。学年での行動規範にとどまり、異年齢が暮らす学校教育現場の持っている教育力が発揮できないまま3年間経過してしまった。
- 地域の方々と協力しないと子供が育たないという思いが強くなり、現在コミュニティスクールの準備を進めている。地域と家庭と学校と3者がうまく連携できるように、組織づくりや行動を検討している
- 学校が避難所になっており、防災関係でも地域との連携が必要である。なかなか進んでいなく、自治会と市と学校とがきちんと連携して準備しておかないと、いざという時に機能しないのではないかと。
- ICT、タブレットの活用については、学校においても積極的な活用を進めている。ただ、デジタルの道具を与えたことによる影響を大人はしっかり把握すべき。明らかにゲームの時間やYouTubeの視聴が増えている。それにより生活リズムが崩れてしまっている子が以前よりも多くなっている。学校の指導や家庭だけでなく、大人総がかりで子どもを守ると同時に、活用力もつくようバランスを取っていくことが必要。

(委員)

- コロナ禍で町内会活動が制限された影響が大きく、地域の中の絆や地域力が落ちているというのが実感。敬老会や夏祭り等多くの住民が関わるイベントは、地域の団結力が強まることから意義ある町内会活動であるが、コロナ禍ではできなかった。
- 町内会の事業費が使えなかった予算を活用して、今まで予算がなく更新できなかったごみステーションを二つ作ることができた。できることをやるのは大切。
- コロナの収束が見通せない状況の中で、町内会活動にも工夫が必要である。大きな事業は細分化してできないか、例えば、町内会をブロック毎に分けて事業実施できないか等、いろいろな工夫をして出来るだけ事業を実施することが重要と考えている。

鶴岡市総合計画審議会 市民教育専門委員会 委員名簿

(五十音順、敬称略)

No.	氏名	役職名簿
1	伊藤 恭子	鶴岡市スポーツ少年団本部副本部長
2	井上 夏	藤島歴史公園「Hisu花」ワークショップリーダー
3	加藤 勝	鶴岡市自主防災組織連絡協議会会長
4	草島 陽子	鶴岡市社会教育委員
5	酒井 英一	鶴岡市文化財保護審議会副会長
6	櫻井 田絵子	市民まちづくり会議委員
7	佐藤 司	鶴岡工業高等専門学校副校長
8	鈴木 郁生	鶴岡市小学校長会長（鶴岡市立朝暘第一小学校校長）
9	鈴木 淳士	鶴岡市町内会連合会常務理事【委員長】
10	照井 和	鶴岡市消防団団長

任期：令和5年1月1日～令和6年12月31日